

モラロジー研究の—— 現状と課題——

水野治太郎

1. モラロジーの特色と課題
 - (1) モラロジー研究の目的
 - (2) モラロジーの体系について
 - (3) 道徳的事実の研究
 - ① 人類階級の研究
 - ② 道徳観念の起源と発達
 - ③ 人類(社会)の進化論的考察
 - ④ 道徳現象の研究
 - ⑤ まとめ
 - (4) 道徳的価値の研究
 - ① 聖人研究
 - ② 最高道徳論
 - ③ 因果律の原理
 - ④ 道徳的技術の研究
2. モラロジー研究の基本課題
3. 研究の歩みと体制について
- モラロジー教育について

1. モラロジーの特色と課題

(1) モラロジー研究の目的

モラロジー (Morality) とは、広池千九郎博士(1866~1938)の独創による、新しい科学的な道徳学の体系をさした名称である。広池博士は、わが国における東洋法制史学の開拓者として、専門家の間では高く評価されていた。しかし、1915年以後、それまで取りこんで来たいっさいの研究を放棄して、このモラロジー研究を開始し、爾来、10数年の研さんののち、1928年に3千余頁にのぼる大著『新科学としてのモラロジーを確立する為の最初の試みとしての道徳科学の論文』を公刊したのである。また一方、モラロジー確立のための研究機関として「モラロジー研究所」を創立し、1935年にはモラロジー教育の専門学校である「モラロジー専攻塾」を開設した。このように広池博士は、モラロジーの研究と教育に、20数年間従事したわけである。

モラロジー研究の目的は、一言でいえば、人類の生存・発達・安心・平和・幸福のために不可欠だと考えられる道徳原理の発見と、その原理の人類社会における効果(価値)を明らかにすることにあった。ではそのような道徳原理とは何であるかといえば、通常、歴史的、社会的に発達した因襲的道徳(The Traditional or Conventional Morality)とはその質において異なる最高道徳(The Supreme Morality)——人類の偉大な指導者(ソクラテス、イエス・キリスト、釈迦、孔子、日本の皇室に流れる道徳思想)の高度な精神的な自覚によって生み出され、実践された道で、しかもこの五者に共通一貫する原理——をさす。広池博士は、彼らの実践した道が人類の生存と発達、あるいは世界平和の確立のためには、まさに最高の道徳原理であることから、最高道徳と命名した。

従って、モラロジー研究の目的は、この最高道徳が因襲的道徳と比較して、いかにすぐれているかを科学的に論証することにあった。このことは科

学による特定の道徳原理の権威づけともいえる。

ところで、最高道徳と比較せられる因襲的道徳は、実は具体的には、近代文明・近代思想の中心となる自由・平等・ヒューマニズムの精神、倫理的態度をさしていたのである。こういえば、一見、理想主義的な倫理学とみえるモラロジーが、きわめて現実味を帯びてわれわれの前に登場してくるであろう。すなわち、問題の中心は、ヤスパースのいう「規準を与える人々」、すなわち人類の精神的指導者に共通一貫すると考えられる道徳原理と cogito に代表される近代的自我意識、あるいは、人権思想との比較研究だといってもよい。そのうえ広池博士は、道徳を人類の生存、発達、安心、平和、幸福の原理と把握していたのであるから、道徳は人間が生きる条件であり、人間らしく成長・発展する基本的法則であり、よりよき経済・政治社会の構成原理であり、国際平和を築く基盤と考えられていたのである。かくしてモラロジーは、現実社会を道徳化しようとの意図をもつ総合的学問であるかのようにわれわれの目に映るのである。と同時に、現にある人間の姿を把握し、一方では、人間のあるべき姿を追求した人間に関する総合科学——人間の科学として、浮かびあがってくる。

次に、広池博士はいったいなぜ、道徳原理の科学的論証(権威づけ)を考えたのであろうか。『道徳科学の論文』第1冊目に、数十頁にわたって、道徳科学の研究を思い立った動機と理由を述べている。いまその要点を紹介したい。

第一は、専門の中国法制史の研究によって法の目的が権利よりも義務を奨励することにあることを知り、人類の進歩に貢献するためには道徳実行の効果を科学的に研究する必要を感じたこと。

第二は、世界各国の君主が滅亡するなかで日本の皇室が続いているのは何故か、ということをも学問的に明らかにする必要を感じて研究した結果、それは質の高い最高道徳の実行によることを発見し、道徳研究の必要性を痛感したこと。

第三は、各国とも労働問題をはじめ、ソーシャリズム、サンディカリズム

その他過激な主義主張が破壊的傾向をおびてきた。しかし、これを防いで、すべての民族、階級に幸福をもたらす社会をつくるのは、道徳が根本であることを発見したこと。

第四に、各宗教の権威を増すためにも、道徳実行の効果を証明したいと考えたこと。

第五に、道徳教育をする修身科が科学とはほど遠い単なる教訓であり、不完全である。権威ある真の道徳を確立する必要があると考えた。

第六に、オーギュスト・コントの社会学は道徳実行の効果を間接的に証明するのみで、このほかに、「直接かつ明確」に証明する科学の必要を感じたこと。

第七に、人類幸福増進のためには、これまでの道徳とは全く質において異なる最高道徳でなければならぬと感じたこと。

以上、モラロジー創立の目的は、人類最高の道徳原理が今日の人類社会に不可欠であることを科学的に論証することにあつたといえよう。

しかしながら、このような意味での道徳の科学的研究は、今日、いかに評価されるであろうか。道徳的価値と事実(科学)、価値導出の方法、聖人という理想的人間の評価、その他、その問題意識と方法において、まぎれもなく、今日の科学方法論から鋭い批判をうけるに違いないと思われる。そうした批判にいかにかえ、どのような問題意識と方法によって科学的水準を保ちうるか、が答えられなくてはならない。そこで、今日の研究の現状や課題に入る前に、モラロジーの体系を『道徳科学の論文』に即して説明し、その評価を試み、問題点と今後への方向を指摘したい。

(2) モラロジーの体系について

「今私が茲に公にせんとする所の道徳科学と申すものは、因襲的道徳及び最高道徳の原理・実質及び内容を比較研究し、かつ併せてその実行の効果を科学的に証明せむとする一つの新科学であります。日本語の道徳科学と云ふ語は、英語のモラル・サイエンス (Moral Science) の訳語でありますか

ら、今私は学術上の名称として、之をモラロジー (Morality) と名付けたのであります。」(『道徳科学の論文』第1冊目1ページ)

この一節は、広池博士が与えたモラロジーの定義である。『道徳科学の論文』は、この定義に従って体系ができているといえよう。まず本文は第一巻「因襲的道徳及び最高道徳の原理及び実行に対する科学的考察」と第二巻「最高道徳の大綱」から成り、第一巻が約9割以上を占める。では第一巻の内容はどのように展開されているであろうか。次に、その章別の題目を掲げて参考に供したい。

〈『道徳科学の論文』本文目次〉

() 内は、何冊目かを示す。但し、一般に入手しやすい新版によつた。

- 第一巻「因襲的道徳 (The Traditional or Conventional Morality) 及び最高道徳 (The Supreme Morality) の原理及び実行に対する科学的考察」
 - 第1章「道徳科学とは何ぞや」(第一冊目)
 - 第2章「モラロジーと人類生活の完成」
 - 第3章「人類階級 (Classes) の先天的原因」
 - 第4章「人類階級の後天的原因」(第二冊目)
 - 第5章「人類の精神的及び物質的生活の根本的原理」
 - 第6章「先天的及び後天的原因より来る所の人類の身体、生活上に現はれたる特徴及び其運命に対する精神的考察」
 - 第7章「本能、知識、道徳、社会の構成、文明の性質及び人類幸福の相互関係に於ける考察」(第三冊目)
 - 第8章「人類の進化 (Evolution) 及び退化 (Degeneration) の法則に関する考察」(第四冊目)
 - 第8章上「人類の平和及び幸福享受の方法に関する現代人の思想の誤謬」
 - 第9章下「労働問題・小作争議・国家的公共事業・社会事業若くは慈善事業に対する貴族・富豪・資本家并に地主の方針及び方法の誤謬」
 - 第10章「因襲的若くは普通的道徳 (Traditional, Conventional or Common

Morality)』

第11章「文明進歩の傾向と道徳の質的進歩」

第12章「最高道徳の実行者」(第五冊目)(第六冊目)

第13章上「日本皇室の御祖先天照大神の御聖徳及び日本皇室の万世一系の真原因」

第13章中「日本皇室の万世一系と他のあらゆる万世一系との原因の考查」

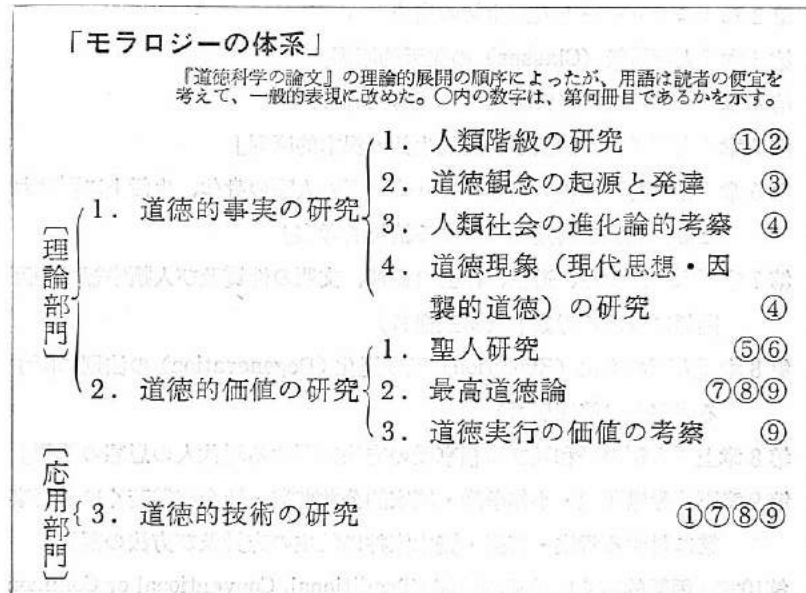
第13章下「朝鮮李王家の日本皇室に併合され給ひし原因は人為の政略に出づるか將た自然の大法則の結果か」

第14章「最高道徳の原理・実質及び内容」(第七冊目)(第八冊目)

第15章「最高道徳実行の効果に関する考察」(第九冊目)

第2巻「最高道徳の大綱(Synopsis of the Supreme Morality)」

次に、以上の目次内容をもとにして、モラロジーの体系を次のようにまとめてみた。



図表に示したモラロジーの体系は、まず理論部門と応用部門に分かれる。しかし実際の展開においては、厳密な区分がなく、広池博士もその点を特にことわっている。ところがモラロジーの体系としては、明らかに理論部門(事実の認識と原理への発展)と応用部門(道徳教育への展開)に区別しうる。応用部門をデュルケーム学派の用語にならって、道徳的技術の研究と呼んだ。

(3) 道徳的事実の研究

理論部門の第一は、道徳的事実の研究である。道徳的事実の研究といっても、主要文献を自分の立てた体系に従ってならべ考察する一種の文献学的な研究であった。『道徳科学の論文』に「新科学としてのモラロジーを確立する為の最初の試みとしての……」の文を付した理由の一つは、こうした研究上の不備を自ら感じてのことであったと思われる。

「道徳的事実」という語はデュルケーム学派が、社会現象としての道徳事象の意味で用いた。しかし、モラロジーでは、質の高い道徳を実践せざるを得ない自然的(必然的)・社会的・歴史的事実の意味である。そのため、人類一般の生物学的、心理学的、社会学的、人類学的、文明史的考察が方法の中心となる。しかも、進化論の影響が強い時代であり、ダーウィン、スペンサーに始まって、レズリー・スチーブン、ウェスターマーク、ホブハウス、サムナー、ギディングズ、チャピン、カーター、ボガルダス等が事実としての道徳進化の問題を扱い、道徳の科学的研究に道を開いたことに強い影響をうけている。従って進化論者の主要テーマ、生存競争、環境適応、適者生存、自然淘汰、社会(人為)淘汰、獲得形質遺伝を論題として取り上げているだけでなく、進化論の根本思想ともいえる生物、動物に共通な自然法則によって人間も規制されるという理論を採用した。もちろん、一方では、ダーウィン思想と深く結びつきながら、生存競争の理論を斥けて生まれた「相互扶助」、「社会連帯」、「社会構成」の理論からも強い影響をうけていた。特に、最高道徳を基礎とした新しい社会システムを社会構成の原理の語で呼び、独

特な倫理思想を形づくっていたのも、この思想的系譜をうけついただからだと考えられる。

さらに、「モラロジーの組織の基礎を成せる諸科学」では、「地質学、地文学、生物学、進化論、発生学（遺伝学）、環境改良学、人種改良学、土俗学、生理学、人類学、人種学、人種起原学、考古学、法理学、骨相学、心理学、社会学、犯罪学、文明史、法制史、経済史、道德史（下略）」というように、自然諸科学と歴史諸科学が圧倒的に多い。これによっても、広池博士が、科学的研究の対象と考えた道德的事実が、社会的、文化的事象を包含しながらも、自然的、必然的な道德的進化の事実とみていたことがよくわかりただけだと思う。

以上のように、道德の科学的研究の名の下に取りあげた道德的事実が、社会学的観点からのそれではなく、進化論的観点からの自然的・必然的事実だとすれば、科学的手段による道德（価値）の基礎づけとは、つまりは倫理的自然主義の方法—自然主義のファラシーではないか、今後のモラロジー研究において、この点をいかにして克服するか、という疑問をうけるに違いない。この点ののちにくわしく取り上げることにして、少し詳細に道德的事実の研究の内容に立ち入って述べてみたい。方法論の上で異論があっても、道德研究の出発点であるからである。

① 人類階級の研究

人類の階級とは、種々の観点（身体、健康、知力、環境、役割、収入、地位その他）からみられる人間の上下の違い（不平等）で、その違いを生む原因（条件）が何かを分析している。取り扱う現象そのものはアメリカ社会学での社会的成層（social stratification）とよく似ている。しかし人間の違いが社会的に規定されたものとみる社会的成層研究に対して、広池博士は、社会的な要因も一つの原因とみている。

すなわち広池博士は、人々の違いが生じた原因を先天的・後天的原因の二種にわけ、それぞれの原因ごとに、その条件をくわしく分析し、結局、人間精神の働きがいかに大切であるかを論証した。先天的原因とは、環境・遺伝

であり、後天的原因とは、生れて以後の精神の働きを示す。精神作用を重視することで、すでに決定された条件をのりこえることが可能だと説いている。ここでは、生物学、遺伝学、心理学の歴大な文献を駆使しており、ある専門家は、すでに十分なる研究であると評したほどである。

次には、精神作用の内容を人類学的、文明史的、犯罪学的、骨相学的に考察している。ここで精神作用を知識と道德に分け、進化論の立場に立つウッズ（Frederick Adams Woods）の知識と道德性の相関関係を調査した研究を詳細に紹介して、知徳一体という道德原理の論証に努めた。

次には、人類の身体的特徴（顔、体型その他）と精神の発達段階を考察したもので、今日での性格学的研究と考えられる内容が展開されている。最後に、人類の道德心と容貌、あるいは肉体上の特色との関係に深いつながりがあることを力説している。

こうして人類の階級の研究は、人間の自然的、生物的レベルと精神的、知的レベルでの全体構造を認識する人間の研究—人間学的考察を行ない、人間の本質的特色を精神（知識・道德）に求め、精神的発達と人類社会（集団）の進歩・幸福度とに相関関係を認め、そこに研究対象として重要な道德的事実を見出し、道德こそ人類進化の要因であるとの命題の立証に努めたわけである。

② 道德観念の起源と発達

このテーマは、道德史、習俗学のテーマである。ここでは、もちろん、サムナー、サザーランド、ウェスターマーク、ボガルダス、クロボトキン、ホブハウス、チャピン、ギディングズ等の研究とエルウッド、マクドゥガル、デューイ、レヴィ・ブリュール等の文献もみられ、人類学、社会学、社会心理学、道德史、習俗学等の広範な文献を渉猟している。

ここでの主題は、道德観念が時代や社会の要求から生れ、自己保存の性質があること、および、人類の自己保存の本能に着目し、そこに知識、道德の発達のエネルギー源を見出し、文明、文化の発達の原動力を明らかにしようとしたことにある。

しかし他方では、こうした生存競争の理論とは違って相互扶助、社会連帯、社会構成の理論にのっとって、人類集団、社会成立の原理が、人間の道徳心（連帯、犠牲）にあること。さらには、社会の発達には人間の知識、道徳の質と量に比例するのであって、だから、今後は、利己の本能から生まれた因襲的道徳では不十分で、質の高い道徳、最高道徳に改めなくてはならないと結論づけている。

以上の理論の展開の仕方は、進化論的発想の特色というべき発生論的方法にもとづいている。つまり、道徳の本質をその起源にもとめ、人類共通の発展法則——家族の構成から国家団体への発展過程——から、人類の道徳的レヴェルをはかり、また社会階級の成立過程を説明している。つまり、社会の成立・発達の原因、法則に適した意識、道徳を有する者が社会の成員として上位を占める、と説いている。

以上の研究内容は、方法論に疑問が残るが、にもかかわらず、今日の我々に迫ってくるものがある。その一つの理由は、こうした研究の究極の意図が、聖人の高度な自覚にもとづく愛、慈悲という道徳原理の基礎づけを目的としながら、道徳を社会習俗にまでおろして考察しようとする態度である。従って、道徳史研究は、今日のモラロジー研究における重要な研究分野といえよう。しかしながら、今後は、この領域においても、問題意識と方法において反省を迫られている。

③人類（社会）の進化論的考察

ここでは、人類社会の進歩・退化の法則の内容を考察している。まず生存競争の法則と道徳原理の関係をとりあげ、最適者たらんとするには、人類社会の法則に適応すること、つまり、人類社会の本質にかなった最高の道徳原理に従うこと、という前の結論をうけて、適者生存の基準となるところの人類社会に働く「自然的、社会的法則」を明らかにしている。

広池博士は適者生存の法則を自然淘汰の法則と人為淘汰の法則に分けており、人為淘汰の法則としては、法的、社会的サンクションをあげている。この考え方は、アメリカの社会学者、チャピン、カーバー、ボガルドス等の社

会淘汰説に従ったものである。しかし中心はやはり、あくまで自然淘汰に置かれている。

では、そうした人類進化の自然法則、社会法則とは何かというと、それがのちにふれる因果律の原理の内容を指しているわけである。広池博士は、人間の精神作用・行為と幸・不幸の関係を支配する法則を因果律の原理の語で呼び、その内容を自然的因果律と人為的因果律に二分している。いうまでもなく、前者が自然淘汰、後者が人為淘汰である。かくして人間を支配する道徳原理とは、進化の法則であって、道徳原理の科学的説明とは進化論の基礎づけのことであったといえよう。

④道徳現象の研究

ここでは、第一に現代の思想——政治・社会思想を扱い、第二に、因襲的道徳をならべてその欠陥を指摘している。第三に、こんどは逆に、文明、文化を真に発展させ、道徳の質的進歩をもたらした偉大な人物の行動・思想を取りあげ、こうした現象に、最高道徳へと進化した人類の歴史を見出し、最高道徳の実行こそ、歴史的必然の課題であると結んでいる。

第一の点では、政策主義（政治、社会情勢をこういう角度から認識していた）から始まり、帝国主義、軍国主義、保守主義、社会主義、国家社会主義、民主主義を取りあげている。そしてどのような政治、社会体制をとろうとも、道徳を根本としないなら人類の幸福はありえないと述べている。さらに労働問題をはじめ社会問題に対する資本家側の対応策が根本的に間違っており、道徳的解決法——労資共に道徳的精神の発動からなる根本的解決法を必要とし、特に資本家側に対して強い反省を迫っている。

第二の点では、因襲的道徳が自己の保存および発達の本能にもとづいて起こったものであることを指摘して、平和維持のためには力がないと結論づけている。ここでは因襲的道徳の内容をくわしく取りあげているが、おもに、心情・精神作用を中心に問題が展開されている点に特色がある。

第三の点では、道徳の質的進歩の歴史を述べている。まず、ヒューマニズム、平和思想を取りあげ、フーコー・グロチウス、カント、ウィルソン、そ

の他ノーベル、カーネギー、道徳主義的な経済学を唱えたウィリアム・スマート等の思想を紹介している。そして、いずれも自己犠牲と人類愛護の精神から出た崇高な道徳的行為であると称えている。その他、社会的方面では社会福祉事業、個人的方面では歴史小説の主人公の名をあげて、次第に温和、慈悲に近づいていると述べている。

道徳発達の歴史を描くのが目的であるはずなのだが実際の歴史的事実を詳細に取りあげていない点に疑問が持たれる。ここにも、歴史的事実を扱う道徳史研究が望まれよう。

⑤ ま と め

以上の道徳的事実の研究は、道徳を実践せねばならぬ自然的、歴史的、社会的事実を見出すための研究であった。これらの結論は以下のようにまとめられると思う。

第一に、人類社会の発達の原動力は、精神作用（知識、道徳）にあること。

第二に、その精神作用のさらに根本的エネルギー源は、人間の自己保存の本能にあること。すなわち道徳は、自己を利するための生存方法であること。

第三に、従って、歴史的に発達してきた因襲的道徳は、本来利己性を持ち、この点に欠陥があること。従って、質の高い道徳の実践が必要とされること。

第四に、しかし一方では、人間の社会化の過程には、別の道徳観念（自己犠牲、連帯、奉仕等）を見出すことができる。ここに、いわば道徳的本能ともいう人間性の別種の起源がみられること。

第五に、人類社会には適者生存の法則が働いており、それに意識的に適応することによって最適者になりうる。そのためには、最も質の高い道徳を行なわねばならない。

第六に、人類の道徳史は、次第に自己利益から自己犠牲へと進歩しているという事実。

こうして、人類の創造進化の法則が質の高い道徳の必要性をうらづけていることを結論づけている。

では、因襲的道徳とは全く質の異なる最高道徳とは何か。かくして次の問題である道徳的価値の研究に入っていくわけである。

(4) 道徳的価値の研究

ここでは因襲的道徳とはその本質において異なる最高道徳の実行者（聖人）の実践と教訓を考察し、その精神作用の内容（知識・道徳）の質の高さにおいて共通性があることを指摘している。

次にこうした聖人の道徳に共通一貫する原理を導き出し、最高道徳論として詳細に体系的に内容を説明している。最後に、道徳実行の価値の考察を行なっている。以下、この内容の要点を紹介し、今後の発展的契機を見出したい。

① 聖人研究

広池博士は世界の道徳系統を5つに分けている。第一は、ギリシアのソクラテスを祖とする道徳系統、第二は、ユダヤのイエス・キリストを祖とする道徳系統、第三は、インドの釈迦を祖とする道徳系統、第四は、中国の孔子を祖とする道徳系統、第五は、日本の皇室に流れている道徳系統である。（この他、マホメットについては研究不備の理由から除外している。）これらの宗教・道徳・哲学の開祖を聖人と呼び、次にそうした聖人に共通する特色を次のように10項目にわたって述べている。

〔聖人の特色〕

- 第1に、神を信じ、その意志に服従して自分の欲望を主張しないこと。
- 第2に、往々天啓をうけていること。
- 第3に、伝統（人類を創造進化する働きを示した肉体、精神、国家、社会のそれぞれの領域における恩人の系列）を重んじていたこと。
- 第4に、一視同仁の慈悲の精神。
- 第5に、自己の品性の完成に努めたこと。
- 第6に、人為的に主権をつくらなかったこと。
- 第7に、一切の虚飾を排したこと。

第8に、中庸。

第9に、人心救済の精神と行為。

第10に、世界の平和と人類の幸福を目的としていたこと。

聖人研究は、思想・教訓の理論的方面よりは精神的方面、つまり人格、品性の高さを物語る記録の収集と解釈に重点がおかれていた。これに対しては、諸聖人の間に違いがあるはずであるし、もし共通点があったとしても「極めて一般的、概念的レベルにおいてのみ起こり得るであろう」(ジョン・ブルーベッカー教授)、さらに「モラロジーでは、諸聖人に一貫している原理があると述べているが、この原理はどのようなものか、またその原理はどのようにして把握できるのか」(O. F. ボルノー教授)という疑問が寄せられる。こうした疑問に対して、広池博士は、「記録に現はれて居る世界諸聖人の実行は、之を一々に観察すれば、断片的にして皆各々其行動を異にして居ります。乍併、其行動に一貫する所の道徳上の原理を通覧すれば全く一に帰するのであります。即ち、ソクラテス、キリスト、釈迦及び孔子の実行に現はれたる道徳上の原理は、皆人間に於て認められて居る道徳の程度を超越して、偏に人心救済と云ふ事に在ったのです。只其諸聖人の説く所は其時代と場所と場合とに相応するやうに努力せし結果、其有様を皮相的に一見すれば各々相違があるのです。即ちソクラテス、キリスト、釈迦及び孔子の教ふる所と其事蹟とは、必ずしも皆同一ではないやうであります。乍併、宇宙自然の大法則(神の心)によりて其人心の開発若くは救済を為して居った事は同一であるのです」(『論文』⑥1785ページ)と答えている。

上の文中にある、人心の開発もしくは救済とは、ソクラテスの「無知の自覚」、キリストの「迫害者のためにも祈れ」という厳しい愛のいましめ、釈迦の「慈悲」、孔子の「仁」、日本の皇室に流れる「清明心」等を民衆に対して示し、人間の精神的指導原理を確立したこと、この原理をもって人類の精神的救済のために努力したことで、この点に、東西精神文化の源流の一致点を見ているわけである。

以上の問題意識と研究の方法に関して、どう評価すべきであろうか。

第一に取りあげたい聖人研究の意義は、諸聖人の間に共通した道徳原理を求めるといふ基本の目的についてである。

これについて筆者は、三つの観点を用意しようといいたい。その一つは、道徳における世界的視野からのコンセンサスを求めるための研究としての意義をもつこと。人類は今日、地球的視野、宇宙的視野からの問題解決のための共通する価値判断のわく組みを必要としてはいないだろうか。そのためにも、道徳に関する人類的コンセンサスを確立することが重要な課題となろう。こうしたコンセンサスが、はたして人類の教師たちの研究から得られるかどうか確証はない。だが重要な手がかりは得られるであろう。

次は、同じ観点ながら、もっと必然性をもった課題として、新しい人類社会の組織原理を諸聖人の知識道徳に共通する原理に発見すること。人類はいま、経済面を中心にして、諸個人、諸企業、諸国家を超越する新しい統合の原理を求めているといえよう。当研究所には、こうした新しいシステムの根幹に、諸聖人に共通一貫する道徳原理において、積極的に研究を進めている研究員もいる。最後に、諸宗教団体、諸宗派のもつ排他性を、こうした研究の積み上げによって排除できるとすれば、人類の文化の向上に寄与するところ大であろう。これこそ広池博士の夢の一つであった。

第二は、聖人を模範とする道徳教育(人格教育)についてである。広池博士は聖人の本質を次の言葉で表わしている。「聖人は世界の人心を救済せむが為に、終身苦勞して厭わず、而して其苦勞は之を以て神(本体)の苦勞と為して自己を没却し、其自己の苦勞の結果の全部は之を人類に与えて、自己自身は何物をも望まぬのであります。而して人類に対しては之を咎めず、善人をも、悪人をも、若くは自己に反対するものをも、慈悲の心に依りて救済せむとしたのでありまして、其目的は聖人自身の実行に対して人類が各自に自発的に之を模倣せむ事を望んだのであります。」(『道徳科学の論文』⑥1814ページ)

広池博士は、進化論主義者の説に従って、人類発達のエネルギー源に本能をおいた。進化論者はこの本能を必然的法則の命ずる倫理と理解したから、

本能の命ずるところに従え、という命題を立てた（生存競争説）。これに対して、広池博士は、進化論思想のもう一つの流れ、すなわち社会連帯主義、相互扶助説というもう一つの源泉に目を向け、前者を自己保存の本能、後者を道徳的本能の語で呼び、自己保存の本能の利己主義化を防いで浄化すること、道徳的本能を助長することを、自然の教える倫理法則と解した。結局、この倫理法則は、人類の活動のエネルギー源を利己主義から利他主義に転じたわけである。そして、利他主義による模範的人物として、聖人を理解している。そこで、聖人の人格的感化に道徳教育の目標をおき、モラロジーの性格として品性完成の科学ということ説いている。

こうした理論的背景には、次のような考えが横たわっているように見える。一つは、聖人の人格の歴史を超越した偉大性。もう一つは、人間を無限の品性を完成する人生過程の中に置いて、人間がみずからをみがくことを、生きる目標にする立場。そして、すべての学問がそうした問題意識によって貫かれた道徳学—いかにして自己を高めるか—をもって出発点とすべきであるという思想。

筆者はこの二点を、湯浅泰雄著『宗教と人間性』（昭39、理想社）で発見し、広池博士の聖人研究が並々ならぬことを痛感した。湯浅氏は、近代的世界観の特色である、近代的自我意識（デカルトの cogito をモデルとする）を分析し、「公理としての自我意識」の語でこれを特色づけた。これに対するもう一つの源泉（聖人の道）を「課題としての倫理的自我意識」と呼ぶ。「公理としての」とは、「与えられたままの状態で、そのまま、すべての認識や評価の基礎となるものである。」従って、「近代の倫理学は、徳の問題、特に徳をいかにして身につけるかという〈建徳〉の問題について、理論的立場からはほとんど注意をはらっていない。」これに対して「自我意識を〈公理〉とみないで〈課題〉とする立場は、近代哲学の基本的な方向を逆転するものである。しかし、このような問題の立て方は、実をいえば、決して新しいものでも、珍しいものでもない。むしろ、近代以前の倫理学の伝統的アプローチの仕方に通ずるものである。」先の建徳とは、「与えられた自我意識の

根底にある〈真の自己自身〉を認識してゆく過程が建徳である。日常的な用語法でいえば、人格の向上ないし道徳的品性の陶冶である。」（前掲書第1章参照）

かくして、自己自身が不完全であり、それゆえに自己を高め磨く存在として認識して、聖人の到達した高い人格を目標に、自己を実現してゆくことが、モラロジー教育での課題である。

第三は、聖人研究の幅を広げるために、近年の諸研究を取りこみ、今日の時代的要求に答えることのできる内容にすることである。

まず初めはベルグソン、ヤスパース等の哲学的研究である。ベルグソン（1859～1941）をここであげたのは、『道徳と宗教の二源泉』（1932）にみられる「閉じた社会」（閉鎖的、排他的社会）、「開いた社会」（人類的社会）に対応する「閉じた道徳」（自己中心的性質をもつ家族愛、祖国愛）、「開いた道徳」（人類愛の上に成立するもの）の比較である。ベルグソンは、この両者の違いを質的に違うものとして説明しており、広池博士の因襲的道徳と最高道徳の区別と、ほぼ同じ趣旨とみてよいのではなからうか。広池博士は、通常の家族愛、祖国愛を自己利己的であるがゆえに因襲的道徳と呼び、その純粋化を自己の教育目標と考えた。そして、純粋な愛のモデルとして、自然のすべて生きとし生ける物を創造進化する働き（エネルギー）を想定した。聖人は、こうした自然の働きを自からの行動に具現した人々である。そこで、聖人の人格的感化によって生来の利己性を脱却することを道徳教育の課題とし、こういう過程を経過してはじめて、利己性を持つ家族愛、祖国愛を純化できると考えるわけである。

これに対してベルグソンもまた、閉じた社会の枠を破って開いた魂を現わす少数の英雄が登場して、人類愛が生まれ、開いた社会とその道徳が形成されるが、そうした少数の英雄は、自然の大きな生命の創造的進化におけるエラン・ヴィタール（生の躍進）を現わす存在だと説いている。モラロジーの聖人研究の重要な助言を得る意味において、ベルグソンとの対話は興味のある課題である。

ヤスパースは、彼の歴史哲学と哲学史の双方で聖人にふれている。すなわち、『歴史の起源と目標』(Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, 1949)では、紀元前500年ごろを中心にした前後数百年間を枢軸時代と名づけ、この間に誕生した東西の偉大な思想家によって、その後の人類は精神的に導かれたと述べている。これに対して、三巻になる予定の哲学史、『大哲学者たち』(Die Großen Philosophen, Bd. 1, 1957)の第一巻は全体として三つのグループに分けられている。

第一のグループ。規準を与えるひとびと

ソクラテス、仏陀、孔子、イエス

第二のグループ。生産しつづける愛知することの創始者たち

プラトン、アウグスチヌス、カント

第三のグループ。根源から考える形而上学者たち

アテクシマン드로ス、ヘラクレイトス、プロチノス、アンセルム、スピノザ、老子、竜樹

「規準を与える人々」(Die massgebenden Menschen)とは、「他のいかなる人たちもなさなかった仕方人間存在を歴史的に規定した人びと」の意味であった。

ここで重要なのは、ヤスパースの大哲学者たちをとりあつかう態度についてであろう。これについて、『ソクラテス、プラトン』(理想社)の部分の訳者山本友三郎氏は、解説の中で、その特色を次のように述べておられる。

「いったい過ぎ去った哲学することについての単なる史実的な知識は、無意味なものであって、わたしたちの求めているものは、哲人たちとの交際なのである。そして、わたしたちは可能的実存として、みずから哲学するときだけ、かれらに近づくことができるのである。わたしたちは単にテキストを読むだけではない。というのは、わたしたちは当惑し、呼び覚まされ、自由にされ、また引きつけられ、つき離されるからである。それによってわたしたちは聞きまた問う運動のさなかに入ってゆく。こうしてはじめて本来の交際がはじまる。このような交際によってこそ、自己自身にたち帰ること、伝

統の根源において自己の根源をふたたび見いだすことが可能となる。こうしてわたしたちは目覚め、いわば本来の自己にかえることができるのである。大哲人たちとの交際を通して、わたしはわたしの自己教育のひとつの道をえらぶ。このようにして、ヤスパースが哲人たちに接する態度の根底には、まず哲人たちとの交際ということがある。ついで、哲人たちがわたしたちに対してもっている教育作用の重視ということがある、といえるであろう。」(251ページ)

このように四聖をはじめとする大哲学者に取りくむヤスパースは、哲学者との交際——実存的関係が焦点となり、彼の哲学史は、われわれに実存を覚せいせしめるうえでいかなる影響力をもつかという点から、過去のすべての哲学者を問題とした。

ヤスパースのこのような基本態度に対して、広池博士はどうであったか。すでに聖人をその精神の高さにおいて理解することがその態度の特色だと述べた。いまこのことをヤスパースとの対比において述べると、歴史的資料を通じて明らかな人生の歩みにほうふつとして物語られている高度な精神的境地と道徳的実践を読みとり、そこに対話を試み、自己の精神を練磨することが、根本的態度である、といえよう。従って、大哲学者たちと実存的関係において交際をするヤスパースと、どこかに共通点を見い出すことが可能であろう。ヤスパースとの対話を通じて、東西の精神文化の源流を掘り下げることに成功すれば、多大の意義をもつと想像される。

次は、P. A. ソローキン(1889~1968)とアラブハム・H・マズロー(1908~1970)について取りあげたい。ソローキンは聖人(この語は四聖のみならず、ヤスパースの大哲学者、マズローの自己実現の人間のような広い概念)の社会学的な実証研究を行なった。彼は1949年に「創造的利他主義にもとづくハバート・リサーチ・センター」を創立し、非利己的、創造的愛の研究を社会学的方法によって進めた。この研究所の業績として主なものは以下の通りである。

ソローキン『利他的な愛—アメリカの善良な隣人とキリスト教聖人の研

究』(1950)

ソローキン編『利他的・精神的成長の諸形式と技術』(1954)

ソローキン『愛の方法とカ―道徳的変容の型、因子、技術』(1954)

ソローキン『権力とモラル』(1959)

こうしたソローキンの業績の紹介に努める細川幹夫研究員は、広池博士の聖人研究とソローキンの研究方向に、いくつかの類似点があることを指摘している。そして最大の共通点として、「聖人、聖者、善人の研究をして、その結果から人類に永遠の平和をもたらすためには、どうしてもアガペーや慈悲をもった聖的な人間の増加と科学性の増大がなければ実現されないと結論したこと」と述べている。両者の厳密な比較研究と、これによるモラロジーにおける聖人研究の発展が切望されよう。

マズローについては、フランク、G. ゴーブルの『第三勢力——アブラハム・マズローの心理学』(小口忠彦訳『マズローの心理学』産業能率短大出版部)を参照したい。ここでの「第三勢力」とは、「第三勢力の心理学」、つまりフロイトの精神分析学あるいはワトソンその他の行動心理学者から前進した第三の人間性の心理学の呼び名である。

マズローは、フロイトがノイローゼ患者や精神病患者ばかりに研究を集中したこと、ならびにワトソンが統計的処理によって平均的な人間の研究に終始したことを次の理由から批判している。まずフロイトに対しては、人間の弱点ばかり強調して、人間の長所や可能性に考慮を払っていなかったことを指摘し、「もし人が、狂人、ノイローゼ患者、精神病者、犯罪者、怠け者、精神薄弱者の研究に携わること魅了されたら、人類に対して彼が抱く希望はいやおうなしに、ますます質素にますます現実的に、ますます卑小になり、人々から期待することはますます薄れていくだろう。……身体障害者・発育障害者・未熟児・病人などの見本ばかり研究していると、かたわの心理学やかたわの哲学しか作り出せないということは、ますます明白になってきている。自己実現している人々についての研究は、もっと普遍的な心理学の科学的基礎になる」と。

また「ワトソン等の行動主義者は、統計的方法に絶大な強調をおきながら、平均的な人間の研究に片よっている。彼らは可能性や理想よりも現実だけを研究している。ことに、行動主義者は、その研究の大半は動物の研究に基礎をおくが、その結果として、人類を他のすべての動物と特に区別している特徴を、無視あるいは拒否しがちな点を批判している。」

このような考え方から出発するマズローは、人類の中の最良の見本である自己実現的人間を研究対象に選び、その共通点をくわしく報告している。これがいうまでもなく、Motivation and Personality, 1954. Toward a Psychology of Being, 1962. Religions, Values and Peak Experiences, 1964. となって世に出たわけである。

ここでも我々は、マズローの問題意識と関心方向が広池博士のそれときわめて類似していることに驚くとともに、貴重な助言を得ることができると確信している。しかしながら、その類似点とは、聖人研究との比較においてではなく、のちにふれるモラロジー経済学の構想において一層の親近感がわく。広池博士は、アダム・スミス以後の経済学—マルクス主義をも含めて—が、人間の経済活動を自己の利益を獲得するための欲望的活動と解することに対して、人間の道徳的本能にもとづく経済活動があるとの立場より、従来の経済学と異なる完全なる経済学—自己も社会も共存共栄しうる経済組織—を提唱した。スミス以後の経済思想が人間性の理解において、マズローのいうように、現実に目を奪われて人間性の他の一面を軽視したことから、招来しているといえよう。

以上、道徳的価値の研究のうち、聖人研究を中心に、その発展的契機を探ってみたが、結論を要約すれば下記ようになるであろう。

第一に、モラロジー聖人研究は、ヤスパースのいう「規準を与える人々」を中心に、諸聖人(準聖人と名づけている)を研究対象として、この精神の高さ、広さ、深さを、実存的交際、対話(哲学的方法)において、また、社会的、心理学的方法によって研究を進め、ここから道徳の質を不断に高め、人間教育の目標をつくり出すこと、に目的がある。

「第一、モラロジーの最初の著書たる本書に所謂世界諸聖人の実行上に一貫せる道徳の最高原理。

第二、自然の法則。

第三、社会の法則即ち社会の慣習及び道徳の法則。

第四、精神作用の法則。

第五、肉体と精神との関係に於ける法則。

第六、遺伝其他人類進化の法則。

第七、農・工・商業及び経済の法則。

是に於て、当該最高道徳は従来の道徳説若くは宗教の信条の如き偏狭なるものではなくして、我々人間の生存と発達とに関するあらゆる法則を含蓄して居り、且つ含蓄すべきものであります。故に最高道徳は、其の実質及び方法より見れば、これは人間の達し得る最高の道徳的思想及び最高の生存手段と云ひ得るのであります。」(同上 2053 ページ)

第三に、最高道徳の基礎的觀念が、正義および慈悲にあること、また人間の人格及び権利発生の原因が義務の先行に帰することの二つをあげている。この二項目こそ、人間の存在を貫く法則の内容として示されたもので、広池博士の自然法論と考えるとよい。しかも、「規準を与える人々」との生命を賭しての対話から生れ出たものと考えられる。

『道徳科学の論文』では、以下、最高道徳実行の諸原理として、自我没却の原理、神の原理、伝統の原理、純粹正統の学問の原理、人心開発救済の原理について述べてあり、最後に、「最高道徳実行の効果に関する考察」として、因果律の原理を展開している。このうち、純粹正統の学問の原理が、モラロジー研究の方向を示唆する重要な内容をもつもので、これについて紹介したい。

純粹正統の学問の原理とは、聖人の至純な精神にもとづく学問・思想・生活の目的と標準を示したものである。まず学問(学者)の目的と標準とは、公平無私な真理探究の精神にもとづき、人類の安心、平和、幸福の実現に参与することであり、研究成果が特定の階級、人種だけの利益を図るものでな

第二に、以上の目標を遂行するには、ここで取りあげたベルグソン、ヤスパース、ソローキン、マズローをはじめ、同じ趣旨の目的と方法を示す諸研究を摂取し、一層の吟味を要するであろう。かくて初めて、広池博士のみずから課した課題を果し、現代の混乱を救うことのできる充実した研究となるものと思われる。

② 最高道徳論

ここではじめて、聖人研究の成果が種々の道徳原理として導き出され、体系化されている。ただここでは、道徳原理のみならず、道徳教育の方法論について、あるいは日常的な道徳的教訓について述べられている。以下、理論的問題を中心に道徳論の内容を紹介したい。

まず第一に、道徳実践の基本態度として、次のことが説かれている。

「今モラロジーに於て謂ふ所の最高道徳は世界の諸聖人が宇宙根本唯一の神の心(慈悲心)を体得して実現せる所の道徳であって、自己の最高の品性を形成せむとする動機及び目的から出発して居るのであります。それ故に此最高道徳の実行も亦結局は自己の保存及び発達に其基礎が置かれて居る形には為って居れど、而かも其所謂道徳実行の動機及び目的は、自己の過去に於ける過失及び罪惡の解脱に存在して居るのであります。」(『道徳科学の論文』⑦ 2042 ページ)

「最高道徳に於ける品性完成の動機・目的及び方法は、第一に、自然の法則と人間の運命の法則とを自覚して、物理学的因果律の外更に人間の行為に関する因果律を信じ、第二に、自己の力の程度を自覚して、宇宙自然の法則即ち神の心たる慈悲を以て自己の道徳実行の標準と為す事、第三に、宇宙自然の法則を遵守する結果として、自己の権利の主張よりは義務の実行に努力する事、第四に、自然の法則を遵守する結果、聖人の教説を体得して神の存在を信ずる事、第五は、以上の原理に基きて神より伝はる所の伝統を尊重して之に絶対服従する事、第六に、以上の諸原理を実行し、其精神を他人の精神に移植して之を開発し若くは救済する事であるのです。」(同上 2045 ページ)

次に、最高道徳の範囲として、以下の七項目をあげている。

く、広く全人類の幸福に寄与すること、学者自身の生活上の境遇立場からの利害感情にうちかち独断的にならぬこと、があげられている。そして、従来の学問（学者）の誤りとして、①客観的事実にもとづかずして、学者の臆説を主となす弊あり、②学者が公平に事物を考察せず、その学者各自の立場によりて、その自己の利害を標準として著説する弊あり、③学者が宇宙現象の全部をその資料とせず、自分の利害、感情に合う一部分のみによって学説を構成していること、を指摘している。また、正統の学者とは、①全く利己主義をはなれ、②聖人の開示した自然の法則を体得し、③もっとも進歩した研究法で研究し、④人類の保存・発達・安心・幸福を増進しようとする、ことをあげている。

このような学問論は、マックス・ウェーバーの学問のモラルを知る人には、興味のつきない内容であろう。ウェーバーとの比較も一つの研究課題である。しかし以上は序論で、次に、政治学、法律学、経済学に言及して、学問の質の改善を訴えている。

それによれば、近世以後の政治学は政策万能主義、法律学は権利万能主義、経済学は、自己利益の経済学説にすぎず、これら異端の諸学説と近世以後の自由主義思想、社会主義思想と、拜金主義に陥った資本主義体制がこぞって人間の欲望をあおり、一切が闘争的、便宜主義、眩惑的、破壊的、一時的手段によって生活し、国際戦争、階級闘争をはじめとする不安と混乱の社会を招いている。これに対して、純粋正統の学問の原理に立てば、人間の慈悲の精神による秩序的、漸進的、建設的、永久的、平和的な手段による問題解決が図られるので、真の安心、平和、幸福の社会が建設されると説いている。

以上の理由にもとづいて、「されば、人類進歩の傾向に伴うて建設せられる所の新科学モラロジーの原理に基きて、現代の政治学、法律学及び経済学を改善する事は極めて必要にして且つ急務でありませう。特に現代の経済学及び経済組織は、不完全なる現代の政治組織及び法律組織と相俟って、不正なる資本家及び企業家の利益を擁護して、正しき真の事業家及び一般公衆

に迷惑を及ぼす如き性質を有するのであります。是を以て速かに純粋正統の新経済学を建設して、以て正しき資本家及び事業家の事業を發展せしめ、以て全国民若くは全人類の真の幸福増進を図らねばなりません。されば私のモラロジー研究室に於ける将来の研究事項中に於て、当該新経済学の研究は特に甚だ重きを置かるるものであります」(⑧2581ページ)と、モラロジー経済学の建設を最も重要視している。

モラロジー経済学の構想は、『道德科学の論文』をはじめ、昭和10年にレコードに吹きこんだ『モラロジー経済学原論』がある。これらは「道徳一体理論」と名づける、道徳に立脚した経済生活の確立を目標にしている。したがってその中には、新しい社会システムの建設も当然、目標の中に含まれている。それと共に、ケネス・E・ボールドウィング等の倫理経済学と共通する問題意識をかかえており、今日の課題は一層、拡大してきたといえよう。

しかも、こうした理論的展開とは別に、広池博士自身が、直接、多数の中小企業経営者を指導し、多大の効果をあげ、その後、今日に至るまで、当研究所では一貫して道徳的経営指導を行なってきた。それらは目黒章布研究員によって『広池千九郎博士の経営指導の研究』（広池学園出版部）と題して、一書に著わされている。このような理論と実践のかね合いによる学問的前進は、わが研究所の特色を最大限に生かした研究となるであろう。

さらに、モラロジー政治学、モラロジー法律学についても、将来の研究課題として残されている。これらの個別諸科学の発展はこぞって、現代の社会問題、とりわけ階級問題、労働問題の解決に寄与するものでなくてはならない。これについて、広池博士は、「現在并に将来に互りて、社会革命を胚胎して人類の最大危機を含有する所の労働問題、即ち之を云い換ふれば、世界人類の物質的生活問題の道徳的解決に出来得るだけの援助を与ふる事でありませう。元来、労働問題の法律的・行政的若くは権力的解決に就いては、従来既に之に当れる個人若くは私立の団体あれど、それは何等永久に互りて人類の幸福に資する力は無いのであって、只一時姑息の解決を為して止むに過ぎ

ぬのであります。然るに当該問題の真の永久的解決法は、労資双方、特に資本家と労働者との主なる人々に対して最高道徳を体得させるに在るので、実に人類事業中の最大困難事の一つであるのです。故に之に向って道徳的解決を試むる人は、最高道徳実行者中の英雄でなければなりません(⑧2663ページ)と述べている。

最後に、これら個別科学は、自己自身を課題とする方法意識のうえに成り立つものであるだけに、人間学の構築がまず果されなくてはならない。

③ 因果律の原理

因果律の原理は道徳的因果の法則のことである。古くから伝えられている応報の原理——善因善果、悪因悪果を進化論、精神身体医学、人類学、社会学の助けを借りて、可能な限り科学的な根拠づけを与え、その存在の立証に努めた。その内容は自然淘汰、人為淘汰であり、人間の精神作用・行為が原因となって、そうした淘汰の法則が作用することを説いた点に、広池博士の独創がみられる。

しかも、その法則を利用して現実の解釈を行ない、以下に述べる人間・集団・階級・国家等の運命の変遷に関する仮説をつくりあげている。ここに一部を紹介しよう。

- ・ 国家の統一や世界平和の実現という大善事に努力した人は、個人の精神生活・物質生活のために努力した人より好結果が得られる。
- ・ 積善の家、積不善の家は何代もかかって出来たもので、一朝一夕ではない。
- ・ 軽微な犯行は、①生理的法則に対するものは疾病、不健康、短命となり、その旨子孫に及ぶ。②心理的法則に対するものは、精神作用が肉体を刺激して骨格および容貌を悪化させ、社会の人に嫌われ、出世の途が絶える。あるいは行動に影響し、失敗あるいは滅亡の運命に陥る。③社会法則に対する犯行は、容貌を悪化させ、滅亡する。
- ・ 個人の善悪・運命を予知することができる。その方法は、①現在におけるその人の精神作用・行動をみること。②現在におけるその人の行動の

動機をみること。③現在におけるその人の精神作用・行動の目的を察すること。

- ・ 道徳を含まない人間の力の結果は、持続時間が短く、一部の成功にすぎず。道徳実行の結果は、永久性、末弘性、審美性をもち最後の幸福を生む。
- ・ 知識偏重して精神に安定のない者、才知はあるが道徳的欠陥をもつ者、知的文明に心酔して子孫を無理に教育する者、自己の知力・才能にまかせて事業にのみ努力する者、知識あっても社会に認められる徳のない者、知力のみでつくった団体、道徳の実行が社会の地位・財産に比例して進まぬ者、自己当然の義務を道徳と誤解して最高道徳を行なわぬ者、法律を守るのみで幸福を得られると誤想せる人々、知識階級の末路、これらの人々、団体の運命はみな悪くなっている。
- ・ 偏狭・がんこ・陋劣・極端なる節儉家の末路も悪い。
- ・ いかにか普通道徳的に完全でも最高道徳に反する者は亡ぶ。
- ・ 創業・守成ともにその方法が同じである者は滅ぶ。
- ・ 最高道徳実行の結果はきわめて確実にして永久性をもつ。

以上の他に、最高道徳の權威を種々のテーマの下に論証している。

- ・ 最高道徳は知識卓越して有用な事業に従事するもの、および普通道徳的努力を積んで成功したものを救済しうること。
- ・ 最高道徳は全世界に卓越する善人・賢者を改心させる權威をもつこと。
- ・ 最高道徳の実行に対して顕著な効果を現わした有名な実例。
- ・ 最高道徳の実行と健康・長寿。
- ・ 最高道徳と運命の改善。
- ・ 最高道徳の実行と子孫。
- ・ 最高道徳の実行と天災・人禍。

以上の因果律研究における最大の方法論的問題は、いうまでもなく出発点あるいは前提にある。因果応報の原理という単一の自然法則がこの世に存在し、人間社会を支配しているという宇宙観である。先に紹介した命題も、そ

うした単一の法則の実在を確信したうえでの結論であり、その点では、今日の科学的世界観と対立する。しかしながら、我々は道徳研究を科学に託した広池博士の意志に従って、今日の科学思想にもとづいた方法上の転換を考えており、ここに、一、二その内容を紹介したい。

第一は、自然的因果律の発想から社会科学的、歴史学的因果律への転換である。広池博士は旧家の研究を重視していたが、今日では同じ対象を扱いつながら、異った世界観と方法において取りくんでいる。この点では、今日の科学的世界観に立った研究を進めているのであって、科学としての市民権を得る条件はあるといたい。

第二は、道徳自体の内容においても、すでにふれた人間に関する現代諸科学の成果をふまえて、不断の努力を続けていくことを目標としており、この点でも、我々は古い世界観をすでに脱しているといいたい。

(5) 道徳的技術の研究

—モラロジー教育について—

モラロジー研究の最終の目的は、モラロジーにもとづく人間教育を常に生命あらしめるためにある。広池博士は、『道徳科学の論文』の完成に10数年費やしたのち、社会教育は昭和6年以後、学校教育は昭和10年に「モラロジー専攻塾」を創設して以来、一貫した教育理念の下に人間教育を行ってきた。その後も、創立者の意志に従って、今日に至るまで組織的な教育活動を推進してきた。以下、この教育理念の特色について述べてみよう。

第一に、モラロジー教育は、先にのべた純粋正統の学問の原理を根幹とする。広池博士は、「純粋正統の学問は、第一に個人の品性を完成する事に力を致し、第二に其所謂品性は自我没却の精神を以て、国家の秩序・統一・国民全部の幸福の実現及び世界平和の実現を図ろうとする人間の慈悲の精神を完成する事でありませう。されば、純粋正統の学問は、人間の或る知識・思想・道徳若くは信仰の一若くは数個を開発するものにあらずして、右の如くに各個人に対して人類の発達及び幸福の根本原理を体得させ且つ実行せしむるに

在るのです」(⑧2553ページ)と述べている。

第二に、その特色は知徳一体の人格教育にある。これについては、「当研究所并に専攻塾はモラロジー并に其内容と実質とを形造る所の最高道徳の原理并に実行の方法を具体的に教授し、知徳一体の聖人正統の教育を施し而して其最高人格の獲得に資せむとするものである」(『モラロジー教育に関する基礎的重要書類』65ページ)と述べられている。

第三に、人間に関する明確な結論にもとづいていること。「(1)人間の天性は善のみにあらず悪のみにあらず。善悪共に之を含む事。(2)右に付、其善即ち道徳の本能を発達せしめ、悪即ち利己の本能を抑ふるを教育の本旨とする事である。(然るに現代の教育は此根本原理に反して知育とスポーツ教育とに重きを置きて、人間の利己の本能に迎合するように勉めて居るのである。)(3)而して人間の天性は教育によりて之を屈曲する事は出来れど、全然変更する事は出来ぬ事、恰かも松の枝ぶりをば人為的に直し得れど、松を杉にする事は出来ぬと云ふ事である。(4)右に付、人間には自ら天然の階級ありて上知、下愚の別は勿論、各人千差万別である。教育は斯かる真理即ち事実を知って後に行はねば無効であると云ふ事を示されてあるのです」(同上50ページ)と述べている。

以上はモラロジー教育の大綱の一部でしかないが、これに対する今日の反省と課題を紹介したい。

まず第一に、今後は生涯教育の観点から、モラロジー教育を体系化し、人間の発達段階別の教育目標を確立する必要があること。

次に今日まで行なわれてきた教育のデータを分析し、システム化を図り、21世紀へと開かれた教育構想を要請されていること。

さらに、モラロジー教育は、人間本性に関して明快な結論に立っているが、今日の人間に関する諸科学の結論は、むしろ人間の本性に対して鋭い疑問を投げかけており、我々はいま一度、人間とは何かを根底から問い直す必要に迫られていること。

2. モラロジー研究の基本課題

モラロジーの特色について、大雑把な説明をしたが、すでにそのつど、今日の課題について述べてきたので、モラロジー研究の広汎な問題意識について、ある程度ご理解いただけたと思うが、ここでもう一度、ふりかえって当面の基本課題についてまとめてみたい。

モラロジー研究の第一の領域は道徳的事実の研究であった。広池博士がモラロジーの科学性を強調するとき、常にこの領域を意識していたようである。しかし、広池博士は、この道徳的事実の意味を、自然的・必然的・進化論的事実の意味に解したわけであるが、そのような生物進化論からのアナロジーによる研究方法が今日、学問的に認められないことはいうまでもない。古川哲史氏は『倫理学』の中で、こうしたアプローチを「科学的倫理学」の語で呼び、その特色は「倫理の基礎を自然の必然的法則のなかに見出そうともくろむところにある」（83ページ）と述べている。その後、フランスを中心に、科学的倫理学の批判として生れたのが、「道徳社会学」（デュルケーム）、「習俗の科学」（レヴィ・ブリュール）であった。前者は道徳への社会学的研究方法、後者は人類学的方法といえる。しかしながら、以上の種々の試みはすべて、生物学、社会学、人類学という個別科学に限定した道徳への問いかけであったとすれば、今後は、人間に関する諸科学を統合したところに成り立つ人間科学的アプローチが要請されているといえよう。人間とは何かを自然的・生物的・社会的・文化的・精神的諸側面から問う必要性が反省されている今日、道徳についての試みも特定の個別科学にゆだねるわけにはいかない。

中村雄二郎氏は、最近、「ニヒリズムと倫理学」と題する『読売新聞』での論評の中で、倫理への三つの問いを取り上げ、それがいずれ一つのところへ収斂していくはずだと説いて注目された。その三つの問いとは、習俗からの問い（文化人類学的アプローチによる習俗学）、状況からの問い（日常的倫理学の性格をもつ「状況倫理学」）、科学からの問い（中村氏はJ.モノーの

『偶然と必然』、清水幾太郎の『倫理学ノート』をあげている）である。

我々も今日の時点では、人間性を種々の角度から問いつつ、あるべき方向を一步一步積みあげていくしかない。道徳的事実の研究も、そうした人間への多角的研究に発展させる必要がある。広池博士の行なった方法も、種々の角度からの人間への問いかけであった。ただ単一の法則を求めることを目的としていたので、多様な方法が一つの問題意識におしこめられ、結果的には単純化されてしまった点が惜しい。我々はこの反省を出発点として、広池博士の意志をうけつぎ、新しい方向へと進んでいきたい。

第二の領域は道徳的価値の研究であるが、広池博士は第二次世界大戦前夜の終末的状况を精神・道徳の退廃と認識した。科学技術に精神文化が追いつかないという状況と、人間の欲望が益々増大する中で、それにハドメをする新しい指導原理の必要性を感じた。そして文明から文化への転換を呼びかけたわけである。そして文明の危機の根源が、人間を生そのまま完全なもの、すべて許されたものと解する近代西欧の倫理思想、哲学、科学にあると見ぬき、逆に人間を不完全なもの、自己自身を課題とする立場に立った新しい指導原理の必要性を痛感した。聖人研究をはじめ、道徳的価値の研究は、そうした西欧の近代思想に対立する問題意識から出発した。こうした問題意識は今日においてもそのまま是認されるだけでなく、むしろ一層、その必要性が増大してきたと考えられる。

ところで自己みずからを課題とする態度は、モラロジー経済学にあっては、経済主体に厳しく問いを向けつつ、完全なる経済組織をつくりあげようとする方向に帰結される。また、政治学、法律学にあっては、同様のことがいえる。このような行為の主体者のあり方を問う方法は、根底に人間学を必要とするであろう。従って、経済人間学、政治人間学、法人間学ともいべき新しい領域を確立しなくてはならない。

しかしながら、人間学の確立が最も強く要請されているのは、モラロジー教育においてであろう。昨年从我々は、主として教育人間学の専門家を当研究所に迎えて、多大の助言を得ることができた。大阪大学の森昭教授、京

大名誉教授の下程勇吉氏、チュービンゲン大学の O. F. ボルノー教授、そして本年は、オランダのランゲフェルト教授が来園の予定である。我々は、こうした専門家の助言をうけつつ、研究を進めていくことを考えている。

一方、広池博士自身が後進学徒に残した研究テーマがある。以下にそれを紹介したい。

「今回発表せる所の本書は極めて不完全なるが故に、只今の私のモラロジー研究室を首め、今後各国に出来る所の各モラロジー研究所に於いて、引続き本書の訂正を為す事は勿論の事ではありますが、次には本書に於いて僅に其の研究の端緒を開きたるもの、若くは未だ全く其端緒をも開かざる事項にして、将来人類の精神生活并に物質生活上に重要なものが沢山ありますから、併せて其研究を継続する筈であります」(①序137ページ)と述べて34項目のテーマをあげている。

- (1) 生物及び人間の生命の連絡に関する研究。
- (2) 自然力の人間に及ぼす影響と一般生物に及ぼす影響との比較に関する研究。
- (3) 自然力と人間の道徳との関係の研究。
- (4) 社会感化力の研究。
- (5) 一代獲得性質の研究。
- (6) 精神遺伝の研究。
- (7) 社会遺伝の研究。
- (8) ゴッダード博士のカリカック家の研究の如きものを首めとして、此の他に広く世界的に此の類の材料を蒐集する事。
- (9) ポベノー及びジョンソン共著『応用人種改良学』に引照せられてあるところの米国ワシントン市の系統記録所の仕事の如き結果と道徳との関係の研究。
- (10) 実験心理学に於ける精神作用と肉体との関係についての徹底的研究。
- (11) 特に道徳・信仰及び肉体の相互関係の研究。
- (12) 道徳・信仰及び寿命の相互関係の研究。

- (13) 動物試験所を置いて特に動物の憤怒・喜悅・驚愕其他の精神作用の其疾病・健康及び寿命に及ぼす影響に関する研究。
- (14) 研究所の財力に余裕を生ずる場合には、植物試験所を置いて、進化論及び遺伝学の研究をも為す事。
- (15) 精神作用と伝染病との関係に就きての研究。
- (16) 人類学的及び文明史的に道徳及び信仰の価値を徹底的に研究する事。
- (17) 犯罪者と道徳教育との徹底的研究。
- (18) 骨相学と道徳との関係に関する徹底的研究。
- (19) 親孝行より生ずるあらゆる結果に関する研究。
- (20) 博愛科学の研究。
- (21) セットルメント・ワーク (Settlement Work 隣保事業) の研究。
- (22) 法律学の原理 (正義) と諸聖人の精神 (慈悲) との調和及び其応用に関する具体的方法の研究。
- (23) 労働問題の道徳的解決に関する研究。
- (24) 政治学及び法律学の原理に関する徹底的研究及び政党の道徳化に関する具体的方法の研究。
- (25) 世界永遠の平和の実現に関する具体的方法の徹底的研究。
- (26) 中流以上の学問若くは才智ある人の子孫に比較的多くの低能児・白痴若くは不具者ある理由の研究。
- (27) 人種改良学・環境改良学及びモラロジーの原理を調和して人間の悪種を善種に変化せしめる具体的方法の徹底的研究。
- (28) 日・時・方角の吉凶及び干支の関係、特に丙午婦人に関する伝説の実否如何、及び以上の事実と道徳との関係に就いての研究。
- (29) スマート (William Smart) の『一経済学者の第二思想』 (Second Thoughts of an Economist, 1916) に関する如き道徳的経済学の完成に関する研究并にモラロジーに立脚する新経済学の建設に関する研究。
- (30) 人口問題・食料問題・移民問題及び道徳の相互関係に於ける研究。

- (31) 世界各国に於いては今日存続せる旧家と道徳との関係、即ち万世一系の家、積善の家及び積不善の家の運命に対する調査。但し此調査は日本・朝鮮・支那・印度其他亞細亞諸国より欧州各国・両米各国に亙りて精密の調査を為す事。
- (32) 興隆期の家と衰運期の家との状態の調査。
- (33) 世界諸聖人の事蹟に関する研究。
- (34) 最高道徳による所の人心の開發若くは救済実行の結果に関する帰納的調査。

これらのテーマについては、今日の科学思想から奇異に感じるものもあるが、その問題意識に遡って考えてみれば、その重要性について理解しうることが多い。従って、一つ一つについてテーマそのものに検討を加えながら、研究を進めていきたい。

最後に蛇足ながら、我々の研究の基本態度について一言したい。広池博士は『道徳科学の論文』開巻一ページに「新科学としてのモラロジーを確立する為の最初の試みとしての……」と書いておられ、「モラロジー研究の名に値する真の研究は今後にある」とか、『道徳科学の論文』の書き直しすら予期していたのである。我々の基本態度も、全くこうした広池博士の学者的良心に根ざしたものでなくてはならない。次に紹介する森昭教授の談話は我々のこうした基本態度に関する貴重な助言である。

みなさん方の恵まれている条件は、この研究の目標という点について、コンセンサスがわれわれの場合よりはるかにあるということだと思えます。事実、コンセンサスがないために、世の一般の研究所、大学では行き悩んでいる。その一番大事なものをおもちであるということが、非常に力強いことになるだろうと思います。ただコンセンサスが、いわば、この点は私が申しあげる必要がないかもしれませんが、一般論で申し上げますと、ここでいわば、なんていいますか、私の解釈ですけれども、広池先生のお説きになったことを信じるあるいは祖述する、信奉するというような形でもって受け取られている。しかし、科学というのは、そういう前

提を一度なくして探求するということがあるわけです。その特定の前提を受け入れたということと、すべての前提を一度疑ってかかるという科学の本質との間にしばしば矛盾がある。この行き来がしばしば行なわれるだろうと思うのです。

私はすべての思想というものが、科学的探求の批判や期待を耐えぬいた時に、ほんとうにそれはより多くの人を納得せしめるに至る思想になると思うわけでありませぬ。研究所というものはわれわれが常識的に信じていることをも、たえずこれを探求の過程へ戻して新たに強化していく、そういう努力がなされなければならないだろうというふうに思うのです。

(『教育人間学の課題と方法』研究ノート No. 33. 18ページ)

3. 研究の歩みと体制について

モラロジー研究所は、広池博士亡きあと、昭和16年にいったん解散の憂き目にあい、戦後いち早く財団法人として復活した。そして、昭和31年には、現所長広池千太郎氏が中心となって研究部が創設されて、研究所本来の使命である研究活動が開始され、今日の基礎を築いたわけである。その後、研究スタッフ、研究図書の実績につとめ、ようやく最近になって研究体制が確立されてきた。しかしながら、20数名のスタッフは、平均年齢30代半ばであり、指導者を他に求めている苦しい研究を続けている。

一方、2年前から、ニュー・サイエンスとしてのモラロジーの確立を目指して、大沢俊夫部長の下に五つの研究室ができた。理論研究室、教育研究室、経営研究室、情報研究室、広池博士資料室である。

理論研究室では、道徳史研究、現代道徳問題の研究、モラロジー人間論等の研究を目標にしている。

教育研究室では、モラロジー教育学確立のための基礎的研究、モラロジー教育計画化のための研究、モラロジー教育統計の指標研究を目標にしている。

経営研究室では、モラロジー経済学・経営学確立のための基礎研究、広池博士の経済・経営思想の研究を目標にしている。

情報研究室では、救済情報システムの整備と情報サービス・センターづくりを目標にしている。

広池博士資料室では、20数万枚におよぶ広池博士の遺稿を最新の方法によって整理、解説作業を行ない、合わせて、広池博士研究に打ちこんでいる。近年、モラロジー創設前の広池博士の日本法制史研究の遺稿が注目され、同志社大の内田智雄教授をはじめとする専門家の手によって研究がすすめられ、その研究の一部はすでに公表された。

以上の研究室の研究目標とは別に、各個人の研究テーマがあり、それを以下で紹介したい。(昭和47年度)

1. 『道徳科学の論文』における経済思想の研究……………	継続
2. 金融史にみる道徳性の研究……………	継続
広池博士の精神史の研究……………	継続
道徳性・言語・文化の起源およびその相互関係についての言語学的、人類学的研究……………	新規
広池博士の書簡の解説とその思想研究……………	継続
1. 広池博士の学統道統に関する研究〔小川含章・井上頼国〕……………	継続
2. 『道徳科学の論文』の引用文の原文および解釈説明文の収集……………	継続
3. 『概要』の講義参考資料……………	新規
——例話：広池博士をめぐるエピソード、人物紹介——	
1. 広池博士の大正元年の大患とその前後……………	継続
2. モラロジーと天理教教理との類似点における具体的意味内容の異同について……………	継続

社会的因果律 (Social Causation) の研究……………	継続
特に	
a. イギリス貴族の生活周期 (Life cycle) と生活範型 (Life pattern) の階級別実証研究	
b. 「地域の変貌と価値意識」(アンケート調査の集計)	
社会化の研究	
1. 設問解答形式「経営とモラロジー」……………	新規
2. モラロジーの経営哲学……………	継続
3. モラロジーの労務管理論……………	継続
1. キリスト教社会倫理研究……………	新規
2. 現代自然法論の研究……………	新規
3. Max Weber 研究……………	継続
1. 日本道徳思想史の研究……………	新規
2. 日本皇室の研究……………	継続
3. 大名家の研究……………	継続
1. 日本道徳史研究 —旧家について—……………	継続
2. 『道徳科学の論文』の引用文の原文および解釈説明文の収集……………	継続
モラロジー経済学の研究……………	新規
老子および荘子に関する問題 (『論文』第三緒言) ……	継続
社会構成の原理とモラロジー経済学について……………	新規
1. 経営と経済に関する博士資料の文献整理と索引の作成……………	新規
2. 企業会計の研究……………	新規
3. リーダーシップ論の研究……………	新規

4. 最高道徳に基づく経営理念の研究……………	新規
広池博士の明治時代における法制史の覚書・不審帖の研究…	新規
1. モラロジーにおける東洋思想(殊に儒教)の受容……………	新規
2. 律令学者(東洋学者)としての広池博士研究……………	新規
モラロジー教育心理学を確立するための基礎的研究……………	新規
孔子研究	
—思想的研究(現代中国の学界における評価を中心として)—	継続
モラロジー教育学を確立するための基礎的研究……………	新規
統計学の教育面および心理学的測定面における応用分野につ	
いての基礎的研究……………	新規
科学思想史における神の認識の変遷……………	新規
モラロジーと経営に関する基礎的研究……………	新規
1. 現代倫理思想の研究……………	新規
2. 西洋道徳思想史……………	新規
3. 道徳教育の研究……………	新規

次に研究発表会について一言したい。当研究所では、2年前より、公開のモラロジー研究発表会を年一回開催することになり、すでに研究所本部で2回開かれた。この発表会は、科学的研究の公共性を考え、自己の主観的確信のみで終わることなく、公開の場で批判吟味をすることによって科学性を高めようとの意図の下に開かれており、本誌発行とともに継続して行なうことが考えられている。ただそのためには、モラロジー研究に関心を持たれる研究者が一人でも多く参加されることを切望したい。ちなみに、第二回発表会(昭和48年3月17、18日)のテーマ内容を掲げることとする。

〔3月17日 午前の部〕

研究部の動向と課題 大沢俊夫(部長)

第1部 自由研究発表

1. 土佐戦国武将の盛衰と存亡の原因について

横山良吉(研究部)

2. 日本の神話について——戦後の諸研究を中心に——

美和信夫(研究部)

3. 広池博士と日本法の研究 利光三津夫(慶応大教授)

〔午後の部〕

挨拶 広池千太郎(所長)

第2部 シンポジウム『モラロジー経済学をめぐって』

1. モラロジー経済学原理の実践的有効性—京都の老舗にみる道経一体の経営法

足立政男(立命館大教授)

2. モラロジー経済学の基礎 目黒章布(研究部)

3. 現代経済学の課題とモラロジー経済学の可能性

永安幸正(研究部)

4. 道経一体思想の史的考察 土屋喬雄(東大名誉教授)

〔3月18日 午前の部〕

第3部 課題研究発表『人間の本能——モラロジー人間論——について』

1. 広池博士の本性論 桜井東樹(研究部)

2. 心理学における本能論について

岩佐信道(研究部)

3. モラロジー人間論の特色と欠陥、その克服——社会科学(社会学)の観点から——

水野治太郎(研究部)

4. 人間本性の特質——言語研究の立場からの新しいモラロジー人間学構想のためのメモ

黒川洋(研究部)

5. 教育人間学における人間の本性について

下程勇吉(京大名誉教授)

以上、モラロジーの研究方向と内容について粗雑ながら紹介した。しかし、今後、どのような性格の科学を旨とすとか、科学研究へのアプローチについて、最も肝心な問題にふれることができなかった。それは、全く今後の研究員の地道な研究成果の積み上げによることであって、その問題自体が我々の今後の課題なのである。従って、本稿では、今日の研究の現状の紹介にとどめたい。

モラロジーの内容紹介について十分な解説ができず、かえって誤解を招くような方向になってしまった点もあるが、それは全く筆者の研究不足によるものであることを付記したい。